



フラッシュ・ブレイズ

スペシャリストの誇り

茅田砂胡

Sunako Kayata



立ち読み
専用



D 挿 口
T 画 絵
P

ハ 鈴
ン 木
ズ 理
・ ミ
ケ 華

ファロットの美意識



1

ある意味、彼は非常に運が悪かった。

彼はゼベス大学に在籍する四年生で医学を専攻し、その中でも特に病原微生物を研究していた。

ここ何日も校内の実験室に泊まり込んでいたが、手間と根気の掛かる研究もようやく山を越したので、今日は久しぶりに寮へ帰ろうとしたところだった。

既に陽が暮れて外は真っ暗である。それどころか、もうじき日付が変わろうとする時間だった。

大学から彼の寮までは徒歩三十分。

自転車ならその四分の一だ。

ゼベス大学のあるサンデナン大陸東海岸は一年を通じて比較的温暖な気候だが、今は真冬である。

外套の前をしっかり合わせて襟を立て、手袋まで

嵌めて愛用の自転車にまたがったが、走り始めると剥き出しの頬を容赦なく冷氣が刺した。

彼はいつも公園の遊歩道を通り抜けて寮と学校を行き来していた。それが一番の近道だからだ。

この夜も当然のように公園へ向かった。

連邦大学惑星は街の緑化運動に熱心な国だから、至る所に大きな公園がある。

緑を保護するため、夜の緑化地域は極力照明を落としている。

この公園も昼間とはとても見晴らしがいい場所だが、今は真っ暗だった。

歩くのに不自由しない程度の街灯がところどころ遊歩道を照らしているだけだ。

足を踏み入れるのが躊躇われるような雰囲気だが、

この惑星は治安維持には異様なほど力を入れている。こんな時間に公園を通っても危険なことなどない。しかし、この時は別の難儀が彼を待ち受けていた。一刻も早く寮の部屋に戻りたくて、がむしやらに

自転車飛ばしていた彼は、風のように通り過ぎる暗い景色の中に何か引つかかるものを見た気がした。自転車を止めて振り返った。

遊歩道だけは少し照らされているが、それ以外は闇に覆おほわれている公園である。

もう一度、眼を凝らして、それに気がついた。

街灯から少し離れた木の幹にもたれかかるように、足を投げ出して地べたに座り込んでいる人がいる。

うち捨てて通り過ぎてしまってもよかったのだが、これから明け方にかけて気温はどんどん下がる。

もし酔いつぶれているのだとしたら、その状態で朝まで放置したりしたら、間違いなく命に関わる。

彼は舌打ちして自転車を戻した。

親切心からではない。

連邦大学の学生には素行評価というものがある。

無視して通り過ぎて、この相手が凍死でもしたら、そしてこの場に彼が居合わせたことが発覚したら（公園の通過記録から間違いなく明らかになる

が）さらに彼が医学部に在籍中で人体の生理についてもある程度心得ていることがわかったら、責任追及まぬがは免れないことになってしまう。

夜の公園は警備用の自動機械が定期的に巡回しているはずなのに、どうして今まで気づかないのかと訝いぶかしみながら自転車を降りた。

「もしもし……」

意識のない相手を起こそうと軽く肩を叩いたら、その肩が腕ごと外れて地面に落ちた。

絶句していると、今度は首のちぎれかけた身体がぐらりと傾かたむいて倒れてきた。

街灯の明かりに照らされたその顔は、既にただの物体と化してはいたが、かつては間違いなく生きた血肉を持った人間のものだった。

ぽかんと見つめていた彼は今度こそ叫ぼうとして、声が出ないことに気がついた。

反射的に駆け出そうとした足も自由にならない。いつの間にか、彼は地面にへたり込んでいた。

腰が抜けたのだった。

通報を受けた警察は直ちに捜査に取りかかった。

現場を見た捜査官も鑑識も一人残らず顔をしかめ、眼を背けた。

頸部はほとんど切断され、まさに皮一枚の状態でつながっており、両手足は完全に切断したものを、わざわざ縫い合わせてあった。

ただし、その糸はお粗末なもので、しかも至ってぞんざいな縫い方だったから、運の悪い学生が軽く叩いただけで糸が切れて落ちたのだった。

胴体もさんさんに切り刻まれ、内臓はすべて一度取り出されてまた詰め込んであると監察医は言った。遺体には様々な処置が施されていて、そのために正確な死亡推定時刻は不明だが、監察医は個人的な見解として、死後十日は経っているだろうと話した。連邦大学惑星でこんな猟奇的事件は極めて珍しい。それだけに警察も捜査に対して慎重にならざるを

得なかった。

この星はその名前が示すように学校の国なのだ。

共和宇宙中から大勢の子どもを預かっている以上、いたずらに不安を招くのは好ましくないと判断して、警察は当初、詳しい情報を伏せ、ただ、殺人事件が起きたことだけを発表した。

被害者は四十五歳男性。住所不定、無職。

福祉施設に寝泊まりしている失業者の一人だった。

セントラルの出身で二十年前に大学惑星に入学し、

結婚歴はなし。家族もいない。

被害者が最後に確認されたのは惨殺死体となつて

発見される半月も前のことだ。

その夜、被害者は友人たちと馴染みの酒場で賭け事に興じていたが、負けが込んできたので、悪態をつきながら店を出て行ったという。

そこまではわかったが、では肝心の犯人となると、まるで見当がつかなかった。

現場の公園入口には監視装置が設置されているが、

殺害当時の様子は記録されていなかった。

それどころか、被害者がこの公園に入る様子すら記録されていない。

「どういふことだ、これは?！」

さすがに捜査担当者も苛立ちを隠せなかった。

被害者の死因は出血性ショック死。

解剖結果を待つまでもなく明らかだったのが、それにしては現場にはほとんど血が流れていない。

どこか他の場所で殺害されて、あの公園に運ばれ、放置されたことは間違いない。

それなら公園入口に設置された監視装置に遺体を運ぶ様子が映っていないのはならないはずだった。

そもそも現場の公園には歩行者と自転車用の遊歩道があるだけで車両用の道路はない。不審な車両が乗り込んでいけば——その様子が監視装置に映れば、直ちに警備が飛んでいくはずだった。

警察は現場の公園を含む地域を担当していた警備オートメーション用自動機械の記録を回収したが、一時間前に現場を

通った時は何も異常はなかったとなっている。

そして公園のすべての出入り口に設置された監視装置の記録によれば、その一時間後、第一発見者の学生が自転車で公園に乗り込んでいくまで、園内に立ち入った者は誰もいないとされている。

「馬鹿なことを！　ではこの被害者は空から降ってきたとでも言うのか?！」

無論そんなはずはなかった。仮にそうだとしても、上空を飛ぶ飛行機の素性はたちまち明らかにできる。こうして捜査は初手から行き詰まってしまった。

遺体を解剖した監察医は、傷の状況から判断して、犯人は大量の返り血を浴びているはずだと断言した。「被害者はまさに全身傷だらけ、傷のないところを見つけるほうが難しいくらいですが、約半数の傷に生活反応があります」

「つまりこの犯人は被害者をなるべく生かしながら切り刻んだと?！」

「そういうことになります。しかも、死んでからも

刻むことをやめなかったわけですな」

捜査責任者は忌々しげに呟いた。

「怨恨だとしたら恐ろしく根深い恨みだな」

それは言い換えれば怨恨であつてくれとも取れる言葉だつた。

この懸念はすぐに現実のものとなつた。

三日後、今度はログ・セール西海岸の町中で同じ状態の死体が発見されたのである。

現場は薄暗く、減多に人の通らない裏通りだつた。

それだけに監視装置は昼も作動しているはずだが、やはり犯人の姿も犯行状況も記録されていなかった。

さらに二日後、今度はまたサンデナンだつた。

最初の事件現場から二百キロほど離れていたが、海の見える公園で第三の死体が発見された。

被害者たちは年齢も経歴もまちまちで個人的にも接点はない。

唯一、共通していることがあるとするなら、第二、第三の被害者も失業中であり、施設暮らしであり、

身よりもないという点だつた。

ここまで続くと、さすがに世間でも騒ぎ出して、隠し通すのも限界になつた。

連邦大学警察は記者会見を開き、両大陸で無差別連続殺人事件が起きていると説明し、現在のところ、残念ながら捜査に進展はないと発表した。

同時に、外部から密かに専門家を招集した。

犯罪心理学や異常性格に対する豊富な知識を持ち、なおかつ秘密を守る宣誓書への署名を躊躇わない人、さらにつけ加えるなら、医学生の現状に詳しい人を特に選んで招いたのである。

公表は避けたが、犯人は医療に関わる者、または医学的知識のある者だと考えるに足る十分な根拠があつたのだ。

警察としてはもつとも考えたくないことだったが、最悪の場合、医学知識のある学生による犯行という可能性も捨てきれなかつたのである。

その結果、連邦大学で現実に講義をしている人、

研究室を持つている教師や講師たちが集められたが、その中にアネット・ヘッケルの姿があった。

まだ三十歳と若い、彼女は医師免許と臨床心理学の学位を持ち、何度か警察に協力したこともあり、犯罪情報分析の経験も豊富である。

死体の一つや二つでは動じないはずだが、彼女は今回、警察に招かれた時から顔を強^{こわ}ばらせていた。

奇妙な緊張と不安のないまぜになったその表情は、実際の遺体の記録を見せられるとますます強^しまった。犯人への怒りではない。この残忍な仕業^{しわざ}に戦慄^{せんりつ}を覚えたというわけでもない。

彼女にはこんなことをしそうな人間に心当たりがあったのである。

2

「聞いた？ またばらばら死体が出たんだって」

「ひどい有様だったってね」

「結構近いんだよ。行ってみようか？」

さすがに三件も続くと、地元の生徒たちの間でも

無差別連続殺人事件の噂で持ちきりだった。

アイクライン校中等部も例外ではない。

第一の事件も第三の事件もサンデナン東海岸だ。

アイクラインのある南岸からは少し離れているが、
昼の間なら中学生でも見に行くことができる。

リイとシエラも人並みに報道番組くらい見るので、
最近話題のこの事件のことは当然知っていた。

「本当に、物騒な話ですよねえ……」

「その現場が観光地になるってことのほうが物騒だ。

見たところで何も残ってないだろうに」

二人とも殺人現場には興味なかったが、事件には
それなりに関心を持っていた。

報道番組からの情報は限られているが、被害者は
全員、かなり無惨な状態で発見されたいらしい。

こうした事件は一刻も早く犯人を逮捕しないと、
被害が拡大する恐れがある。

警察が血眼になっているのも間違いない。なのに、
犯人逮捕の報は未だ聞かれない。

「この星で人殺しなんて割が合わないはずなんだが、
どうして未だに捕まらないのかな？」

「わたしも不思議です。こちらの犯罪捜査技術なら
すぐに解決できそうなものなのに」

首を傾げながら二人が教室を出ると、意外な人が
廊下で待っていた。

アネット・ヘッケル医師だった。

中学校の中に明らかな部外者がいても——それも
妙齢の美人がいても、この人も教師の資格を持って

いる人だからか、それほど違和感はない。

現に他の生徒は誰も彼女の存在に注目していない。しかし、今日のヘッケルは何故か表情が固かった。ぎこちなく話しかけてきた。

「こんにちは。シェラ」

「お久しぶりです」

シェラは礼儀正しく挨拶した。

実際、この人の顔を見るのは久しぶりだったのだ。以前は週に何度かこの人の授業を受けていたが、最近は必要ないということで免除されたからである。

「ちよつといいかしら？ 話があるのよ」

躊躇^{ためら}いがちに言つて、ちらりとリイを見る。

勘のいいリイはその視線の意味をすぐに察した。

「おれは席を外すよ」

「はい。では後で」

ヘッケルは校内の食堂にシェラを誘った。

下校時間になってもまだ大勢の生徒が残っていて、おしゃべりに興じている。職員の姿も見える。

ヘッケルはその人たちを避けるように、わざわざ食堂の一番端まで行つて腰を下ろした。

その際、意図的に自分が壁際の椅子に座った。

何だか穏やかではない雰囲気だと思いながらも、シェラは素直に腰を下ろした。

ヘッケルは、食堂を背にして座ったシェラの顔をじつと見つめながら切り出した。

「中学生は報道など見ないと思つたけど、ここでもあの連続殺人事件のことは話題になっているよね。生徒たちが話しているのを耳にしたわ」

「それはそうですよ。寮でもこの話で持ちきりです。ご家族からもういぶん連絡が来るようですから」

子どもをこの惑星に預けている家族が心配して、『大丈夫か、気をつけるよ』と言ってくるわけだ。

「このアイクラインやアルサチアンでそんなことを言われるのですから、東岸の学校に通う生徒さんのもっと大変だと思いますよ」

「ログ・セール西海岸も同じよ。現に子どもを一時

帰宅させたいという相談もいくつか来ているわ」

「親心とはありがたいものですね」

十三歳の美少年がしみじみうなずく頷いて言うには何とも不似合いな台詞せりふだったが、今のヘッケルにそこまで氣を使う余裕はなかった。

「あなた、あの事件を聞いて——どう思った？」

「どうとは？」

美しい紫の瞳を瞬^{またた}かせて、シエラは不思議そうに相手を見つめ返した。意味がわからなかったのだ。

ヘッケルはシエラの背後の食堂に視線を走らせ、誰も自分たちの会話を聞き取れないことを確認して、さらに声をひそめた。

「彼がやったのだとは思わなかった？」

シエラは驚いた。

この『彼』が誰を指しているかは明らかである。だが、シエラは今まで一度たりともそんなことは考えなかった。

夢にも思わなかったと言っている。

呆^{あうけ}氣にとられて相手を見つめたが、女医の表情は

厳しく引き締まり、どう見ても真剣そのものだ。

本気で言っているらしいと察したシエラは慎重に問い返した。

「何か根拠があつておっしゃっているんですか？」

「彼ならあんな犯行も可能だわ。そうじゃない？」

「もちろんです。簡単にできるでしょうが、それとこれとは話が別です。あの男が実際にやったという確証があるんですか？」

「ないわ。何も。ただ……」

ヘッケル医師は声を低めた。

「エクサス寮の記録を見ると、彼はこのところ、頻^{ひんぱん}繁に夜間に外出しているのよ」

「ですけど、先生。それだけでは……」

「それだけじゃない。彼が医学を学んでいることは知ってるわね。その担当教授に会って話を聞いたの。つい先日、セム大の医学専攻科では一年生が揃^{そろ}って初めての解剖実習を行ったそうよ。もちろん、その

中に彼もいた」

ヘッケルは辺りを気にしながらますます声を抑え、シエラの眼をじつと見つめながら硬い顔で言った。

「——その際、彼は担当教授にこう尋ねたそうよ。生きている人間はいつ解剖できるのかって」

シエラは何とも言えない顔になった。

いかにもあの男の言いそうな台詞だった。

しかし、それだけでは根拠としてはいかにも弱い。

「その前に伺^{うかが}いますが、どうして先生があの事件を調べているんです？」

「あなたには話さないといけないでしょうね。ただ、誰にも言わないと約束してくれるかしら？」

「はい。リイ以外の誰にも言いません」

「そのヴィッキーにも話して欲しくないと云ったら」

「それはお約束できません」

間髪を入れずにシエラは言った。

ヘッケルもわかつていたらしい。苦笑しただけで、

それ以上の追及はしなかった。

警察の依頼で捜査に協力していることを打ち明け、そうした関係で、世間には公表を控えている遺体の詳しい状況を知っているのだと話した。

それを見てすぐにあの男を連想したヘッケルは、まず、あの男の通う高校へ行つて話を聞いたという。

「意外にも学校での彼には友人が多いそうよ。ただ、親しいと言われた生徒に話を聞いてみると、学校の外で彼と会つたり遊んだりすることは滅多にないと云つていたわ」

そこで寮の外出記録を調べ、今度は大学まで話を聞きに行ったのだ。

人間の解剖実習は医学生なら臨床を専攻する者もそうでないものも誰もが経験する実習の一つである。

あの男もセム大学の医学部に——正確に言うなら医学専攻科に通っている。

しかし、実際の身分は高校生だ。間借りのような状態にあるわけだが、成績はトップクラスだと言う。

ヘッケルはもちろん、これが連続殺人事件絡みの捜査だなどとは言わなかった。

最近の学生の能力と傾向について伺いたいのだと口実を設けて面会を申し込んだ。

セム大のクスコー教授は五十年配の大柄な男性で、突然尋ねてきたヘッケルにも快く応対してくれた。

「今年の学生は豊作だね。十代で医専一年まで来た生徒が大勢いる。一番若い生徒はまだ十四歳だよ」

医学専攻の一年は一般大学の三年生に相当する。

順当に進学してくれば普通は二十歳のはずだが、連邦大学惑星は飛び級制度を採用している。

成績が優秀ならどんどん進級できるし、大学入学資格試験に至っては受験年齢の制限はない。十代で専行課程までくる生徒も決して珍しくないのだ。

ヘッケルは相づちを打ちながら耳を傾けていたが、さりげなく本題に入った。

「そうした飛び級生の他にも今年は珍しく受講生という形で通う高校生がいると伺いましたが？」

「ミスタ・ファロットのことだね。彼ならわたしが受け持っている」

教授は笑って頷いた。

「一風変わってはいるが、彼も非常に優秀な学生だ。特に人体に対する興味と理解は並はずれている」

それはそうだろうと思ひ、背筋が冷たくなるのを感じながらも、ヘッケルは曖昧に笑って問いかけた。「教授は何故、彼を変わっていると？」

「ふむ」

これは意外な質問だったようで、クスコー教授は瞬きして首を傾げた。

「具体的にどこがと言われると困るがね。たとえば、彼は未だにチェーサー校に在籍している。さつさと必要な単位を取って正式にうちに入学してしまえばいいものを、どういうわけか急ごうとしないんだ」「才能はあっても勉強に意欲的ではない？」

「いや、そんなはずはないね。現にこの間も……」そこで教授は苦笑した。何やら複雑な笑いだった。

「つい先日のことだ。医専一年は初めて解剖実習を行つたんだが、彼の手際はそれは見事なものだった。よほど入念に下調べをして、模擬研修シミュレーションを積んだのだろうが、実に堂に入つたものだった。人体に刃物を入れるのが初めてとはとても思えなかったね」

実際、初めてなどであろうはずがない。

ヘッケルはそれをよく知っていた。

しかし、口にはせず、無言で話の先を促した。

今年のセム大学の医学専攻一年生は八十人。四人一組で二十の班をつくり、一斑で一体を担当した。

「彼はまるで熟練した講師のようだった。不慣れな他の生徒に的確な指示を出していた。それも決してああしろこうしろとは言わない。むしろ遠慮がちに『それでよかったつけ?』とか『そこはこつちから切つたほうが早いんじゃないか?』とか言っていた。結果的に他の学生たちは彼の指示通りに作業を進め、彼の所属した班は二十班の中で、もっとも効率的な実習を行えたわけだ」

その手際に感心したクスコー教授は実習後、彼を呼び止めて声を掛けた。実習の感想を求めるためだ。すると、件の台詞くだんが飛び出してきたという。

「これはこれでおもしろいですけど、生きてるのはいつ解剖できるんです?」

明るい笑顔でそんなことを言われたのだ。

クスコー教授は咄嗟とつさに相手は何を言っているのか理解できなかった。耳を疑いながら問い返した。

「生きてるのだって?」

「そうですよ。人の身体の造りを詳しく調べるなら、実際に生きてる奴をばらすのが一番でしょう」

まったく悪びれない口調だった。

才走つた学生には指導者に無理難題をふっかけて困らせてやろうと考える者が時々いるが、それとは違う。その時の彼の表情は探求心に輝いて、むしろ無邪気にすら見えたという。

従つて逆に教授のほうがいいささか表情を引き締め、身体を強ばらせるはめになつてしまった。

長く教壇に立ち、後進の指導に当たっていると、色々な学生に出くわすものだ。

医療という仕事に限界を感じて鬱状態に陥る学生、研究熱心が高じて怪しげな実験を行おうとする学生、様々だったが、ここまであつげらかんと人体実験をやりましようと言った生徒は初めてだ。

「きみが言っているのは、まさかと思うが、生きた人間を解剖したいという意味か？」

「もちろんですって」

「ミスタ・ファロット。忠告するが、それはとても危険な考えだぞ」

「俺だって何も善良な一般市民とは言いませんよ。もうじき死ぬってことが確実にわかつている奴なら——たとえば死刑囚なんかならどうですか？」

「いいかね、きみは医療を学ぶ者だ。無論、きみはまだ専科生で、実際に医師への道を進むかどうかは今後の選択次第だが、わたしとしてはできればその道を選んで欲しいと思っている」

二年間の医療専攻科を終えただけでは医師免許はもらえない。そのためにはさらに医学大学院へ進み、必要な単位を取得しなければならない。

「わたしは現実はその医師であり、きみたち若者を指導する立場でもある。指導者として断言するが、我々は人の命や人生に多少なりとも関与することはあるかもしれない。だが、人を裁く立場にはない」
それでも不思議そうな表情を浮かべている相手に、教授は諄々^{じゆんじゆん}と言いつつ論じた。

死刑の確定した囚人であっても、実際にその刑が執行されるまでは法によつて人権が保護されている。自分たちの手でその「命を奪う」ことはできない。それは医療ではなく司法の領分になるからだ。

厳しい口調で言われて彼はやつと納得したらしい。
「そうか……やつちやいけないことになってるんだ。それなら仕方ないですかね」

「そもそも、そうしたことをやってもいいと考える、それ自体が非常にけしからん発想だ。きみの人格を

疑われたくなかったら二度と言わないことだ」

「はい。すみません。知らなかったもんで」

相手は照れくさそうに言って頭を掻いたという。

クスコー教授はこの話をヘッケルに披露しながら困ったように苦笑していた。

「こうして聞くと物騒な思想の持ち主のようだが、彼に悪気はなかったんだ。それは明らかだ。本気で生体解剖をしようと言ったわけではないよ」

それこそんでもない話だった。

彼は間違いなく本気で言ったのだ。

しかも彼にはそれができる。できるだけの意志も技術も精神力も持っている。

ヘッケルは丁重に札を言ってクスコー教授の下を辞し、その足でシエラに会いに来たのだという。

視線だけで意見を求められたシエラは息を吐いて、硬い表情のヘッケルに眼を当てた。

「あなたは実際に犠牲者の死体を見たのですか？」

「ええ、写真と映像だけど——ひどい有様だったわ。

普通の神経ではあそこまで徹底的に切り刻むことは難しいでしょうね」

淡々と話しているヘッケルだったが、その遺体の状況は彼女に大きな衝撃を与えたいらしい。

思い出すだけで茶色の瞳に暗い影が落ちるのだ。

「この犯人は被害者に怨恨があつたわけではない。

それどころか面識もない。そう思われる節があるの。つまり殺害する相手は誰でもよかったのよ。よほど強い怨恨があるならともかく、見ず知らずの相手にここまで容赦なく非道なことができるのは、犯人がよほどその作業に執着しているか、そうでなければ——慣れているからだわ」

「ミス・ヘッケル。あなたの気持ちはわかりますが、その懸念は的はずれですよ。あの事件は違います。

あの男ではありません」

あえて『先生』とは言わず名前で呼んだ。

その無礼を咎めることもなく、ヘッケルは真顔で訊き返してきた。

「どうしてそう言いきれんの？」

シエラは沈黙した。何故と言われても困るのだが、とにかく違うのだ。

理屈ではない。ほとんど反射的にそう思った。

そしてそれがただの推測ではなく、事実なのだとシエラにはわかつていたのである。

だが、シエラには論ずるまでもないその常識が、ヘッケルにはわからない。

「そんなに——彼を信用しているの？」

「とんでもない」

思いきり顔をしかめてシエラは言った。それこそ冗談ではなかった。

あの男と信用——これほどかけ離れた言葉もない。それでも、あの連続殺人事件は違うのだ。断じてあの男の仕業ではない。

しかし、それをヘッケルに納得させるのは至難の業だった。

ヘッケルは既にあの男の手際を見ている。

顔色一つ変えずに警官を立て続けに斬って倒した、並はずれた手際とその時の態度を見ているのだ。

だからこそ、遺体の状況を見るなりあの男に結びつけたのだろう。

「これは極秘だけど、警察は未だに犯人につながる手がかりを何一つ見つけられないでいるの。現場の傍には街の様子を見る監視装置がある。自動機械による夜の巡回も行われている。それなのに犯人の姿はどこにも記録されていないのよ」

「そこがまず変です。あの男が犯人なら監視装置にその姿が映っているはずでしょう」

いくらあの男が殺人の天才でも、そうした装置をごまかすことはできない。

だが、ヘッケルはそれも考慮に入れていたらしい。少しもたじろがず、シエラを見つめながら言った。「ヴィッキーの指輪を使ったのだとしたら？」

今度こそ呆気にとられたシエラだった。

茫然とした眼をヘッケルに向け、ようやく言った。

「……本気でおっしゃっているんですか？」

「わたしは可能性を指摘しているだけよ。それなら現場には何の足跡も残さずにすむわ」

「あり得ません。そんなことは絶対にです」

「あなたはきつとそう言うだろうと思つたわ」

「わたしがリイに傾倒しているからですか？」

シエラの唇に微笑が浮かんだが、そんな場合ではないことに気づいて真顔に戻り、姿勢を正した。

「失礼ですが、あなたの話には仮定が多すぎます。」

どうしてリイがああ男の犯罪に協力するんです？

そもそもああ男が犯人だとしたら動機は何です？」

「殺すこと自体が動機であり、最終的な目的なのよ。」

こういう異常殺人はほとんどがそうだわ」

「あなたは大変な勘違いをしておられる」

シエラの顔には再び微笑が浮かんでいた。

「あの男にとって殺人は——人を殺すという行為は純然たる仕事だったんです。趣味にはなり得ません。ましてや娯楽になど、決してなりません」

「一概に断言することはできないわ。戦場で過酷な」

任務に就いていた特殊部隊の兵士が精神を冒されて、日常生活に戻った後も平和に適応できずに、市民に凶刃を振るつた例は実際にあるのよ」

シエラは不思議そうな顔になった。

「職場と非職場を混同したということですか？」

「まあ……そういうふうに言うかもしれないわね」

「おかしい話ですね。本格的な訓練を受けたはずの兵士たちがどうしてそんな混同を起こすんでしょう。まさにそれを防ぐための訓練でしょうに」

「どんなに訓練しても、意思の力を鍛えたとしても、」

人の心には計り知れない脆い部分があるものなのよ。」

戦場に出た彼らは、それまで経験し得なかった——

想像すらできなかった異常なまでに強い刺激に連日

晒され続けることになった。戦場から離れて平和な

生活に戻っても、今度は急激にたたき込まれたその刺激から解放されない。心では悲鳴を上げていても、戦場の刺激を求め続けることになるんだわ」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。